

小学校外国語活動における現職教員研修への一提案

Proposal for Effective In-service Teacher Training of Foreign Language Activities in Elementary Schools

辻 伸 幸

Nobuyuki TSUJI

(附属小学校)

2009年10月5日受理

Abstract

Effective in-service teacher training is essential for improving teaching skills to prepare for Foreign Language Activities which will become one of the compulsory fields in all public elementary schools from 2011. The purpose of this paper is to identify the factors that can lead to the development of teaching skills of Foreign Language Activities (essentially English Activities) and to propose effective in-service teacher training activities. The author participated as a mentor in in-service teacher training at Sunagawa Elementary School in Sennan city in the southern part of Osaka prefecture from the fiscal year 2007 to 2008. Dramatic improvement of the teachers' teaching skills was observed during this period.

Factors related to the development of the teaching skills were model class exhibition, observation classes, discussions after the observation classes, experiencing the activity contents and learning about theory.

1. はじめに

本研究の目的は、小学校教員がいかにして外国語活動の趣旨を理解し、指導力の向上を目指すのか、その過程と課題を大阪府泉南市立砂川小学校の事例と教員へのアンケート調査から明らかにし、指導力向上に結びつく現職教員研修の提案を試みることである。

新学習指導要領の完全実施が2011年度から始まり、外国語活動（原則は、英語を扱うことから、以後、英語活動と記載する。）が、小学校高学年（5、6年生）で年間35コマ必修になる。全国の公立小学校では、そのための準備を行わなければならない。様々な準備の中でも、担任主体の英語活動指導力向上は、喫急の課題である。文科省でも、各地方自治体の教育指導主事に研修を行い、彼らが地元で、各学校から選ばれた中核教員に研修を実施している。さらに、中核教員による伝達講習、研究授業や研究協議をもつなどの現職教員研修が昨年度から始まっている。まさに、各学校の試行錯誤で、指導力向上を目指している状況と言える。しかし、小学校教員において英語活動の指導に大きな不安を持っていることが報告（ベネッセ教育開発センター、2007）されている。柴田（2005）は、教員研修ワークショップ実施における留意点として教員自身の英語への抵抗感・不安感を取り除くことを一番目に挙げている。粕谷（2008）は、エンピリカルな事象から

ではあるが教員の不安を取り除くことの重要性を訴えている。まさしく教師の不安感を払拭できる現職教員研修が今、強く求められている。

2007、2008年度の2年間に渡り、文部科学省の「英語活動等国際理解活動推進事業」を砂川小学校が受け、筆者も指導助言者として、その現職教員研修に継続的に関わることができた。砂川小学校は、この事業を委託されるまで英語活動に関する研究を先進的に取り組んできた学校ではなく、2004年度から2006年度にかけて、中学校のALTや視聴覚教材により英語の挨拶やゲームに慣れ親しむ程度であった。ほとんどの教師が指導をしたこともないごく普通の小学校であった。ところが、事業終了後にも精力的に担任単独による英語活動の研究授業が行われ、熱心な研究協議が持たれるまで大きく変革してきた。英語活動の指導力をどのようにして向上させていくのか大きな指針を砂川小学校の事例は、多くの小学校現職教員研修に与えてくれるものと推察する。

2. 砂川小学校について

砂川小学校（2009）による学校の概要を以下にまとめる。

・1975年に、周辺の人口増加のため、泉南市立信達小

学校区と新家小学校区の一部から砂川小学校区が編成され創設された。

- ・2008年度には、児童数544名、20学級の中規模校である。
- ・児童の規範意識は高く、生活態度や学習態度は真面目である。反面、自分の意見を主張するような面が消極的な児童が多い。
- ・保護者や地域住民の教育に対する関心は高く、学校教育には協力的である。
- ・学校の教育目標は、「自他を敬愛し協力する子」、「明るく健康な子」、「自ら考え、自ら実践できる意志の強い子」の3つである。

校内研究テーマは、「豊かなコミュニケーション能力の育成を目指して一子どもが表現する喜びを感じ合える授業づくり」である。この研究テーマを達成すべく、コミュニケーション能力の素地を養うことが目的の英語活動からのアプローチを試みたと言える。特に、英語活動で行うコミュニケーション活動の良さを利用して、子どもの表現力を高めることを期待している。また、「総合的な学習の時間」のテーマを「異文化への興味関心を深める」として、英語活動とも関連させようとしている。

英語活動のねらいとして、以下の3つを挙げている。

- ・英語活動を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図る。
- ・英語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深める。
- ・英語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーションの素地を養う。

これらのねらいは、新学習指導要領が目指している目標に合致している。ちなみに、新学習指導要領下の目標は、「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。」である。

さらに、英語活動を高学年だけのものにせず、全学年で取り組める指導・研究体制を築いてきている。校内研究組織に英語研究部を置き、さらに、下部組織として「授業検討部会」、「指導計画検討部会」、「環境整備部会」を設置した。「授業検討部会」では、英語活動の授業をどう設計していくのか研究授業を核に話し合う部会で、指導案の整備と蓄積を計画し、将来の指導に繋がるようにしている。「指導計画検討部会」は、各学年の年間指導計画を作成する役割である。それまでに経験してきた2007年度のALT主体の授業を考察し、

英語ノートの内容も関連させながら、また、参考図書なども参照して検討している。「環境整備部会」は、研究冊子の編集と英語活動における教室、教材の整備が主な内容である。

児童の実態把握をするためのアンケート調査も実施されており、現状を分析しようとする工夫が見られる。ちなみに、2008年度の2学期での調査で、英語活動の時間を楽しんでいる児童は、94%にも達し、とても楽しいと解答した児童は、52%と半数を超えた。

3. 英語活動における取り組みの経過とその考察

砂川小学校が国際理解教育も含め、英語活動に関わり始めたのは、2004年度からである。砂川小学校(2009)の研究経過の段階を整理してみると、次の3段階に分けることができる。

【英語活動導入期】(2004～2006年度)

それまでに教育計画上扱うことがなかった英語活動を導入するに当たり、指導経験が少なく不安が大きい教員たちにとって、比較的に扱うことが容易な内容を取り入れていた段階である。具体的には、英語の歌、NHKの教育放送番組「エイゴリアン」や松香フォニックス研究所作成の「英語で遊ぼう」のビデオ、パソコンソフト「カモンコニーちゃん」などの視聴覚教材を使って、児童達が英語に慣れ親しむことをねらいに実施している。また、数回ではあるが児童の進学先である信達中学校のALTや外部の英会話学校からネイティブスピーカーの派遣により、英語を使った自己紹介やゲームなどを体験することも実施されている。

この段階では、無理な導入を行わず、教師にとって負担の少ない視聴覚教材に頼ることは適切であったと推察する。また、視聴覚教材は児童にとっては、興味・関心を高く保ちやすいという特性もあり、扱う時間も短時間なので慣れ親しむには無理のないものであった。また、ALTや外部の英会話学校からネイティブスピーカー主体の行う英語活動を観察し、その長所や短所を考える機会にもなった。ただ、コミュニケーション能力の育成という点から考えると、英語への慣れ親しみのみでは限界があるのは確かである。さらなる発展を望むのであれば、各種研修会参加や先進校視察は、この導入期こそ必要である。砂川小学校でも、教員に大阪府教育センター主催の小学校英語活動研修や先進校の視察に派遣している。また、研修、視察後、全職員に報告も行われており、着実に基礎を固めつつあったと考えられる。

【英語活動研修充実期】(2007年度)

文科省による「英語活動等国際理解活動推進事業」の委託を受け、研究が大きく進み始めた段階である。この事業は、全国の小学校640校程度を拠点校として指

定し、予算面で大きな支援を行った事業である。文科省において、このように多数の小学校を研究開発学校以外の形で募集を行ったことは、今までなかったことであった。この事業によって、全国の英語活動の教育の充実が大きく前進した。特に、各学校にとって、外部から指導助言者を呼び英語活動教育の方向性を確立させたり、英語活動指導力向上のための研修を受けたり、全国の拠点校の研究発表会に参加できたり、ALTの派遣を受けたりするなど人的資源面での充実が可能となった。また、英語活動にとって絵カード、歌やチャンツのCD、ポスター、世界地図、英語辞書、参考図書等の物的資源面の整備にも大きな役割を果たしたと考えられる。英語活動の指導を充実させるため、英語活動専用の教室も整備するに至った。さらに、地域の拠点校でない小学校にとって、英語活動の授業がどのような指導で行われるのか研究発表会の公開授業で見ることができ、具体的なイメージや英語活動の理論を持つことができるようになった。

筆者と砂川小学校との関わりも本事業によるものであった。当時の砂川小学校校長の中野辰弘氏は、英語活動に対して積極的に支援する考えで、その方針は、全教員が英語活動の指導力向上を目指し、ALTに指導を丸投げしない担任主体の授業を展開することであった。このことは、将来を見据えた卓越した考え方であった。つまり、事業が終了してしまえば、ALTの派遣費用の捻出は困難である。また、高学年の担任だけが英語活動を指導しては、英語活動指導を主体的に考え取り組める学校になっていかないと予見していたのである。

筆者が、2007年度に関わった回数は、計5回であった。3回（6、8、2月）は、英語活動の理念、指導の実際や指導力向上についてのプレゼンテーションを行った。7月には、筆者が勤務する附属小学校で開催した、夏季教科等別研修会英語活動に砂川小学校の教員が参加した。コミュニケーション活動として、外国人にインタビューする場面のシミュレーション活動、ビッグブックを使つての読み聞かせ練習、ネイティブスピーカーとの英会話練習などを行った。11月には、泉南市から教育力向上プログラムの委託を受け砂川小学校の5年生の児童達に英語活動の師範授業を行った。しかし、この時の参加対象者は、泉南市の小中学校で教職経験が5年程度の者であり、砂川小学校の教員の参加は、ごく限られた者であった。

筆者が、特に注意を払ったことは、英語活動の目的がコミュニケーション能力の素地を養うことであり、英語のスキルを習得するものではないという基本路線であった。また、英語嫌いを生み出さないように配慮するとともに、児童達の興味・関心を大切に、児童の発達段階に合致した教育内容を適切な方法で指導することであった。文科省の動向や全国の英語活動の

状況など幅広く情報提供も行った。

2007年度には、上記の筆者が関わった研修以外に、ALT派遣会社による模擬授業参観、2学期からのALTによる英語活動の授業30日、先進校視察などが行われた。

この段階で、全教員の英語活動に対する理念や指導方法への共通理解が深まり、英語活動を担任主体で指導するときに必要な教室や教材の充実が一挙になされたと言える。

【担任主体の英語活動指導実践期】（2008年度）

2008年度になってから、担任主体の英語活動の授業実践の段階に入った。それまでは、ALTに強く依存していた英語活動であったが、担任単独で英語活動を全学年で実施していく方針になった。さらに、1、3、4、6年生で研究授業を実施し、その後、筆者も加わって研究協議会を持つことになった。

6月には、砂川小学校の全教員が英語活動の授業の進め方を再度理解するために、筆者が5年生の児童を対象に模範授業を実施した。英語ノートのLesson 4 “I like apples.”で、担任主体の英語活動指導例として授業を行った。この際、児童にとって負担の少ない授業の展開を目指し、指導過程を「ウォームアップ」、「聞くことに慣れ親しむ活動」、「発音することに慣れ親しむ活動」、「コミュニケーション活動への橋渡しの活動」、「振り返り」という流れで行った。この授業展開の完成したものは、小学校英語活動における授業展開のプロトタイプとして辻（2009）にまとめている。

「ウォームアップ」では、児童達の英語活動に対する緊張を取り除くために、筆者の自己紹介をクイズ形式で児童たちが解答していった。

「聞くことに慣れ親しむ活動」では、絵カードを用いて聞こえてきた英語の絵をタッチしたり、カルタを行ったりして聞くことだけで活動できる内容にした。無理に発音を強要すると、高学年では日本語とは異なる発音の英語に抵抗感を持ち英語嫌いになる児童がでてくる危険性がある。したがって、耳でしっかりと聞けるように慣れ親しませる活動を最初に設定すべきである。

聞くことに慣れ親しんだ次には、「発音することに慣れ親しむ活動」を実施した。ここでは、電子ピアノの内蔵リズムを用いて、今日の「コミュニケーション活動への橋渡しの活動」に使用する英語の表現をチャンツで慣れ親しんだ。筆者の発音に続けてリズムに合わせてリピーティングした。途中、テンポを速くしたり、遅くしたりしてリピーティングに変化を与え児童達の興味・関心が持続できるように工夫した。

慣れ親しむ活動が終わり、「コミュニケーション活動への橋渡しの活動」へ移った。ここでは、慣れ親しんだ表現を使って友達同士で “What animal do you

like? I like…」とインタビュー活動を取り入れた。この活動は、コミュニケーション活動へとスムーズに移行するための一種の楽しい練習と言える。

本来であれば、次に「コミュニケーション活動」として必然的に好きな動物を尋ねたり、答えたりする場面を設定するのだが、筆者が突然、訪問して実施したので、「コミュニケーション活動への橋渡しの活動」とどまり、授業の振り返りシートを記入させて終了した。

この模範授業で留意したことは、筆者が考えてきた授業展開のプロトタイプを進め方を踏襲したこと、日本語を適宜、使用したことである。

この授業で、指導方法の道筋が明確になった。さらに、日本語を織り交ぜて行ったことで、教員の英語を使って指導することへの心理的不安が軽減され、自分でも指導が可能であるという安心感を与えることができた。

その後、各学年担任による4回の研究授業が実施され、毎回、筆者も参観し、研究協議会にも出席した。どの授業も、小学校教員が得意とするアイデアが溢れ、児童達も楽しそうに積極的に活動に参加することができていた。また、授業も基本的には小学校英語活動における授業展開のプロトタイプに沿った形で実践されていた。

研究授業と対をなしているのが研究協議である。児童達の活動を振り返り、「英語の音声や基本的な表現への慣れ親しみ」、「言語や文化についての体験的理解」、「積極的なコミュニケーションを図ろうとする態度の育成」はどうだったのか指導者も参観者も意見を出し合い、課題点を検証する。また、協議の中で生じてくる疑問については指導助言者からのコメントを必要とする。指導助言では、適切な具体例を示して出された疑問点には、しっかりと納得できる説明を心がけた。

筆者以外の研修として、前年度の中核教員からのクラスルームイングリッシュ等の校内研修、中核教員研修、他校の視察、部会の開催等が実施されている。年度の終わりには、国際交流基金関西国際センターから外国人ゲストを15名も迎えて国際交流活動を実施し、コミュニケーション活動を充実できていた。

4. 教員に対するアンケート調査結果と考察

「英語活動等国際理解活動推進事業」が終了する1ヶ月前の2009年2月に、砂川小学校教員22名に対して現職教員研修によって英語活動の指導力が向上したかについてのアンケート調査を実施した。

図1は、この2年間もしくは1年間の現職教員研修（英語活動）で、英語活動の指導を行えるようになったかを尋ねた結果である。英語活動の指導が可能と肯定的に感じている教員が全体の86%を占める状況は、かなりいい結果であると推察できる。小泉（2008）が

大阪府東大阪市の小学校教員（50名）を対象にしたアンケート調査で「あなたは、自信を持って英語の指導に当たることができていますか。」という項目に対して、肯定的な回答は28.6%で、否定的な回答は、73.5%であったことが報告されている。これと比べると、英語活動に対する指導力向上について、砂川小学校の現職教員研修は、大きな成果を上げたと考えることができる。

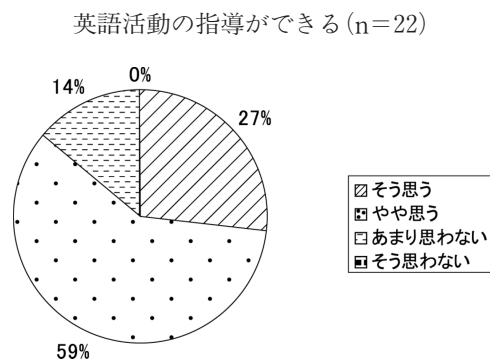


図1 教員の英語活動指導力

図2は、指導助言者の指導で、「あなたの英語活動の指導力は、始める前と比べて向上したと思いますか。」という問いに対する回答結果である。英語活動の指導力に関して向上したと肯定的に捉える教員は全体の86%と図1英語活動指導力と変化はないが、強く肯定的に感じる教員は41%と大きな割合を示している。

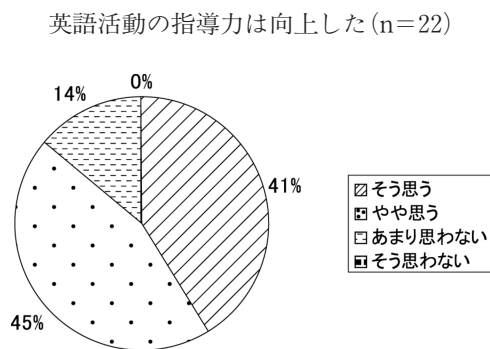


図2 教員の英語活動指導力

この結果は、次の2つのことを示している。一つは、同一の指導助言者が関わる英語活動の理論や理念から始まり、活動内容のワークショップ形式での実体験、模範授業での授業イメージづくり、研究授業や研究協議に至る一連の流れに沿った現職教員研修が機能した結果である。また、指導力は向上したと肯定的に感じることができるが、さらなる向上がなければ、自信を持って英語活動の指導を行うだけの力は、まだ、不十分であると感じている教員も存在する。

筆者が関わった研修の中で指導力向上に役立ったと

教員が最も強く感じているのが「模範授業」であった。その結果が図3である。この模範授業の詳細は、前章にある。

今まで、英語活動という授業のイメージが十分に把握できないままいた教員が、模範授業から具体的な1時間の授業の流れを確認できたことが、教員自身にもできそうな感触を得ることにつながり、このような高い肯定的な割合になったと推察できる。

学校の現状をよく分析した上で、どのような模範授業をするのか十分に検討する必要がある。英語活動の授業の指導に強い不安を抱いている教員が多い場合には、その不安を軽減させ、自分でもできそうだと感じさせる授業でなくてはならない。前章でも触れたが、適度な日本語使用と1時間の授業展開のプロトタイプ

模範授業は指導力向上に役立った(n=22)

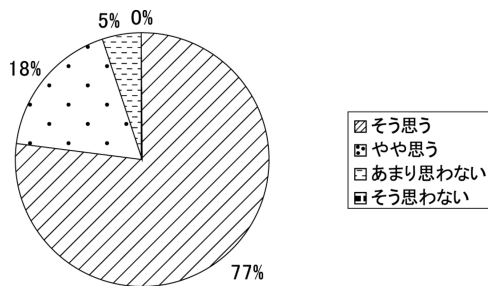


図3 模範授業は指導力向上に結びつくか

2番目に、指導力向上に役立ったものは、研究授業である(図4)。模範授業でイメージをつかみ、授業ができそうと感じていれば、次は、授業実践へと移ることが容易である。それに加えて、砂川小学校の利点は、学校や学年の教員間のチームワークが非常に良いことである。小学校での研究授業では、学年の他の教員が協力して研究授業を創り上げていくことがよくある。

研究授業は指導力向上に役立った(n=22)

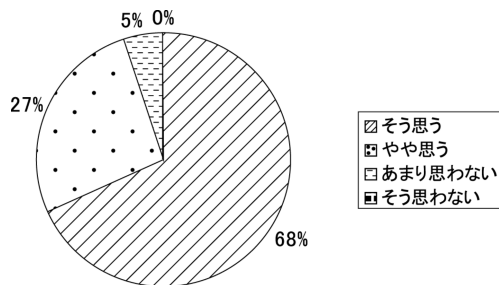


図4 研究授業は指導力向上に結びつくか

砂川小学校も研究授業当日まで、教材を作成したり、指導案や指導方法を検討したり、研究授業と同一の授

業を他の学級で実施したりしてきた。一連の研究授業を計画、実施していく中で、新たな指導アイデアが誕生していく。また、よく練られた、準備のできた授業は、児童達の興味・関心を高め、英語活動に対して好印象を与える。教員はさらに授業をする楽しさを享受できる。児童、教師、教材の3者の関係がプラスの方向へと回っていく。以上のように、研究授業で指導力の大きな向上が期待できる。

研究授業後の研究協議会も教員達の指導力向上に結びつくものとして肯定的に考える者が多い(図5)。多様な教員の意見や改善点を指導力向上へと結びつけることができるからであろう。また、様々な疑問に対する指導助言を適切に受けられることも影響していると考えられる。

研究授業の研究協議は指導力向上に役立った(n=22)

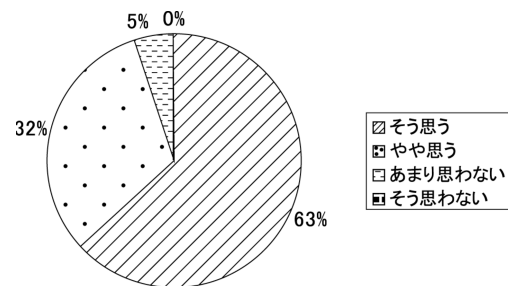


図5 研究協議は指導力向上に結びつくか

英語活動の指導内容を教員自身が体験することも、指導力向上に強く関係していると捉えていることが、図6から分かる。ワークショップ型の活動内容体験は、小学校教員にとっては必要なことである。小学校教員になった者の大多数が、英語活動のような形態で授業を受けてきていないからである。これがないと、教員自身が受けてきた、スキル習得型の中学校や高校の英語の授業イメージで英語活動を指導しようとするであろう。

活動内容を体験したことが指導力向上に役立った(n=22)

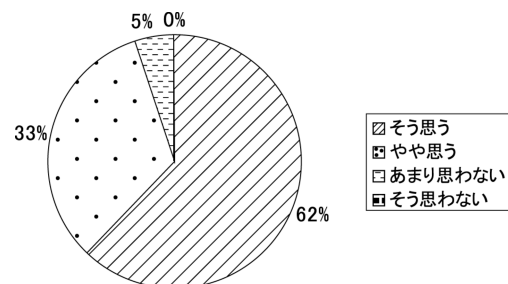


図6 活動内容体験は指導力向上に結びつくか

指導力向上に結びついていないと感じる教員が多い

のは、英語活動の理論や理念であった(図7)。現場の教員は、目の前にいる児童のことを常に大切に考え教育実践を行っている。今までに、指導したことの無い領域を指導する場合、児童達が楽しめる英語活動のノウハウ的な指導内容や指導技術を最優先に獲得したいと考えるのが通常であろう。しかしながら、指導力向上には直接的に作用しない理論や理念面であるが、十分に理解しておかなければならないことと考えている。理論や理念を無視して、児童達が楽しむような活動をして、コミュニケーション能力の素地を養うことに結びつかない活動は、英語活動の教育目標に至らないからである。

理論や理念は指導力向上に役立った(n=22)

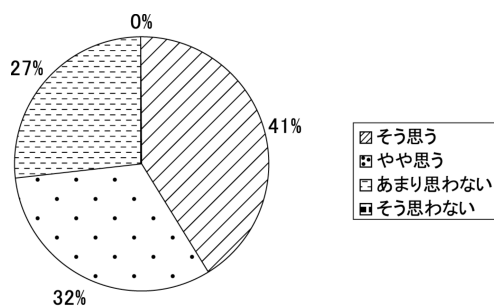


図7 理論や理念は指導力向上に結びつくか

砂川小学校の教員アンケートでは、「英語活動の現職教員研修を振り返って、自由に意見をお書き下さい。」という項目を作り、自由記述での回答をお願いした。その中で、特徴的なことは教員の英語活動指導における心理的な不安の解消をあげる記述が多く出された。具体例を以下に挙げる。

- ・生まれて、初めてした英語の授業で、無我夢中でしたが、何回か授業を見学し、自分がするうちに、少しは流れも分かり慣れてきた。
- ・英語活動について全く分からなかったところに指針を聞き、具体的な方法を学んだことがよかった。
- ・英語の授業に対しては、イメージが浮かばず不安でしたが、模範授業を見て、「私もやってみよう。」と思えるようになった。
- ・英語活動に、どのように取り組んでいいのか分からず、不安と、嫌な気持ちだけで、遠ざけていました。でも、子ども達が好きになり、楽しく取り組ませるために学習していき、かたを張らずに取り組めばいいことに気がつきました。
- ・指導助言を受けたことや、今の英語活動の状況、今後の方向を聞かせてもらうことによって、安心して英語の授業ができるようになりました。
- ・子どもを英語嫌いにさせないようにしようと、初めは、身構えていましたが、模範授業を見て授業の進

め方がわかりました。

- ・今の自分の力でも、やっていける実践的な研修ができて良かった。

教員の指導不安の解消は、多角的な面からのアプローチが必要である。一つは、教員自身の英語の使用に対する不安を解消するアプローチである。この不安の解消には、ネイティブスピーカーのような英語を使う必要は全くないという意識付けを行うことである。通じない発音は訂正が必要だが、日本人なまりのある英語で堂々と英語活動を行うことを推奨することが大事である。また、授業で使うべき英語は、限られておりクラスルームイングリッシュを徐々に使えるようになればよいと気楽に取り組む姿勢を伝え、この面での不安軽減になるであろう。もう一つは、英語活動の授業のイメージを持てるようにすることである。そのための方法として、模範授業が有効であることが明らかになった。しかも、模範授業は、その学校の児童や教員の現状に沿った指導方法で行わなければならない。教員が、これなら自分でもできそうであると感じることができなければ、模範授業は模範ではなくなる。例えば、教員の指導力に合わせて日本語を適切に用いた授業などが考えられる。また、授業を構成する活動のある程度パターン化するとイメージしやすくなる。本研究では、筆者が開発した「小学校英語活動における授業展開のプロトタイプ」を使った。

その他の振り返りとして、次のようなものがあった。

- ・ゲーム等で楽しませるだけではなく、必然性を持たせた授業の組み立てをしていかなければと言うことを、勉強できました。
- ・音楽専科なので、授業の組み立てなどは、あまり考えなかったですが、各学級での取り組みにもっと英語の歌など取り入れる工夫が必要だと思う。
- ・来年度から子ども達の学年があがるにつれ、どのように、どの程度レベルアップしていくとよいか考えていきたい。
- ・英語に親しみを覚えた。受験のための英語ではなく、体験しながら行う活動は、人と人とのコミュニケーションのために必要と感じるようになった。

何人かの教員は、英語活動の教育上の意義や次への課題を発見し、前向きな意見を出している。児童もそうであるが、何よりも教員が英語活動の楽しさを見つけ、コミュニケーションを取ることに満足感を得る段階までに発展していることが言える。小学校教員は、概して真面目で、表現力やアイデアが豊かな人が多い。いったん研究が進み出せば、教員集団で力を合わせて課題を克服していくと改めて感じることもできた。

5. 結論

英語活動指導経験の少ない小学校にとって現職教員研修は、教員の英語活動指導力向上に大きく寄与できると考えられる。英語の得意な教員に英語活動の指導を丸投げしたり、高学年担任に英語活動の指導を全面的に一任したり、ALTや外部講師に強く依存したりすれば、目標とするコミュニケーション能力の素地を養うどころか、児童の英語嫌いを増産し、中学校英語教育に悪影響を及ぼしかねない。

本研究で明らかになったように、砂川小学校のような小学校が増えてくれば、英語活動の必修化の完全移行がスムーズに行われ、今後さらに発展していくことが可能となる。

英語活動の現職教員研修で、どのような内容を実施していけばよいのか、砂川小学校の事例検証から以下に列挙する。

- ・新学習指導要領が求めている英語活動の目標を正しく理解する理論や理念の研修
- ・新学習指導要領が提示している教育内容を理解する研修
- ・理論や理念の共通理解が得られた後、英語活動の授業イメージを持つための授業見学（模範授業や実践校授業見学）
- ・自校での英語活動の年間指導計画の立案
- ・教材や教室の整備
- ・朝の会等の短時間で児童が英語に好感を持てるようなゲーム、歌、クイズ、ビデオ等の実施
- ・全学年で英語活動の研究授業の継続的な実施
- ・研究授業後の継続的な研究協議会の実施

以上の項目は、基本的に上から順番に行うと教員の負担が少ないと予想される。さらに、これらの内容で現職教員研修を行う上での留意点を挙げてみる。

- ・英語活動の理念や指導に精通した外部の同一の指導助言者を年間通して招聘し、継続的にアドバイスや

情報が得られるようにしておく。

- ・管理職の理解や支援を得ておく。
- ・英語活動の教材や教室環境充実、参考文献購入のための予算を確保する。
- ・教員が先進校視察やワークショップに参加できるように予算を確保し、伝達講習を実施する。
- ・全教職員で、英語活動の現職教員研修に参加し支える。
- ・学校全体で優れた同僚性を育む。
- ・児童の現状を常にアンケート等を取りながら把握に努める。

以上、現職教員研修の内容と留意点を砂川小学校の事例研究から導くことができた。今後、英語活動を対象とする優れた研修事例を集め、さらに進化した教員指導力向上に結びつく現職教員研修の内容と方法を確立することが重要であると考ええる。

英語活動の指導力向上は、先生方のたゆまぬ努力と同僚性があつたからに違いなく、温かく研修に参加させていただいた砂川小学校の先生方に謝意を表する。

参考文献

- ベネッセ教育開発センター、(2007)、『第1回小学校英語に関する基本調査 ―教員調査報告書』ベネッセコポレーション
- 粕谷恭子、(2008)、「担任をささえる教員研修のありかた」『小学校英語教育学会 紀要』第9号
- 小泉仁、(2008)、『小学校英語活動と中学校英語の連携についての総合的研究―研修の実態と教員意識の調査― 平成19年度科学研究費補助金基盤研究(B)研究成果報告書』、東京：東京家政大学
- 柴田里美、(2005)、「学級担任による小学校英語活動―教員研修ワークショップの現状と課題―」『小学校英語教育学会 紀要』第6号
- 砂川小学校、(2009)、『研究紀要―豊かなコミュニケーション力の育成を目指して―』大阪府泉南市砂川小学校
- 辻伸幸、(2009)、「小学校英語活動における授業展開のプロトタイプ開発」『和歌山大学教育学部紀要教育科学』第59集

